

## 今週の為替相場見通し(2025年11月17日)

| 総括表      |      | 先週の値動き |                 |        | 今週の予想レンジ        |  |
|----------|------|--------|-----------------|--------|-----------------|--|
|          |      | 注      | レンジ             | 終値     |                 |  |
| 米ドル      | (円)  |        | 153.41 ~ 155.05 | 154.53 | 152.50 ~ 156.50 |  |
| ユーロ      | (ドル) |        | 1.1541 ~ 1.1656 | 1.1622 | 1.1550 ~ 1.1700 |  |
| (1ユーロ=)  | (円)  |        | 177.38 ~ 179.97 | 179.60 | 177.50 ~ 181.50 |  |
| 英ポンド     | (ドル) |        | 1.3085 ~ 1.3215 | 1.3175 | 1.2900 ~ 1.3400 |  |
| (1英ポンド=) | (円)  | *      | 201.46 ~ 204.07 | 203.56 | 196.00 ~ 206.00 |  |
| 豪ドル      | (ドル) |        | 0.6490 ~ 0.6580 | 0.6537 | 0.6500 ~ 0.6600 |  |
| (1豪ドル=)  | (円)  | *      | 99.46 ~ 101.83  | 101.02 | 100.50 ~ 102.00 |  |

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

国際為替部 為替営業第一チーム 大野 梨紗

(1)今週の予想レンジ: 152.50 ～ 156.50 円

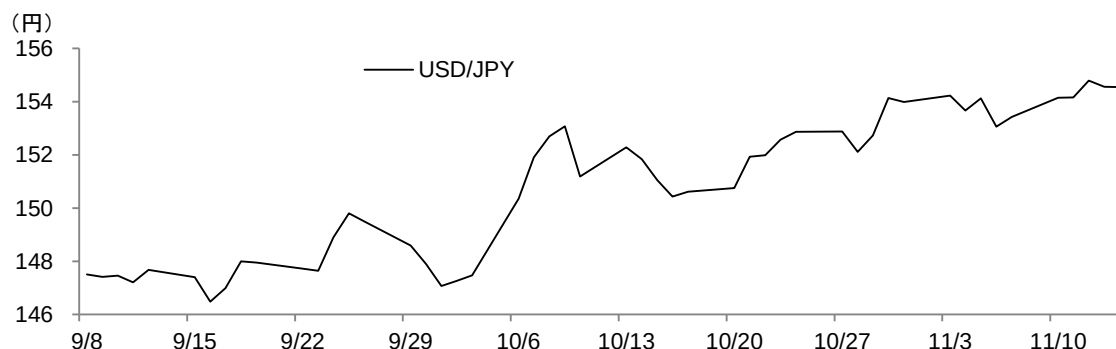
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円はレンジを切り上げる展開。週初10日、ドル/円は米政府機関再開への期待が高まり、本邦時間早朝からドル買いが進行し153.77円でオープン。その後は日経平均株価の堅調推移も支えに、154円ちょうどを挟み底堅く推移した。11日、ドル買い基調が継続しドル/円は154円台半ばに上伸。その後はリスク回避の動きから154円台前半へ水準を切り下げた。海外時間に発表された米週次ADP雇用統計の軟調な結果を重しに一時154円台を下回るも、その後回復。12日、ドル/円は154円台後半に続伸。海外時間には2025年2月4日以来の高値となる155.05円まで上値を伸ばしたが、その後は米金利の下落につれ154円台半ばまで下落。13日、ドル/円は米政府機関閉鎖解除を背景にドル買い優勢となり、155円ちょうど付近まで上昇。海外時間は米株安が重しとなり154円台半ばを中心に推移した。14日、本邦時間は米政府機関活動再開を受けた持ち高調整の動きが見られたものの、ドル/円は概ね154円台半ばを中心とした推移。海外時間には米株下落の動きにつれ一時1円程度の下落幅となったが、その後同水準まで回復し、154.53円で越週した。

今週のドル/円は引き続き高値圏での底堅い推移を予想する。米政府機関ではつなぎ予算が可決され、史上最長となる43日間の閉鎖を経て活動を再開した。今後はこれまで発表が見送りととなった指標の結果をもって米国の実態経済を確認する必要がある。14日(金)、米労働省より米9月雇用統計については20日(木)に公表されることが明らかとなった。また、10月分の米雇用統計や米CPIについても近く明らかになる見通しである。このような状況下、今週は19日(水)にFOMC議事要旨(10月会合分)の発表が予定されている。10月FOMCでは2会合連続で▲25bpの利下げを決定した。しかし実際には据え置き票と▲50bp利下げ票も投じられており、Fedメンバー間におけるスタンスの差異が目立つ。パウエルFRB議長は会合後の会見で、12月の利下げを「当然の結論に程遠い」と牽制し、現在の政策金利を「多くが中立と捉えるレンジにある」とも説明しており、政府閉鎖中は民間データも参照する姿勢を示しつつ、物価の上振れリスクと雇用の下振れリスクの板挟み状態であることを強調した。FRBが「雇用」を重視するスタンスへ移行している現状を鑑みると、次回会合での利下げ有無は雇用情勢次第と言えよう。パウエルFRB議長会見では先々の利下げ見通しについてメンバー間で意見の相違があることも明らかとなっているため、議事要旨において詳細を確認したい。この内容を受け、12月FOMCでの利下げ観測がさらに後退すれば、ドルが買われやすくなり、ドル/円のもう一段上の高値圏推移定着を後押ししよう。

## (3)先週までの相場の推移

先週(11/10～11/14)の値動き: 安値 153.41 円 高値 155.05 円 終値 154.53 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

国際為替部 為替デリバティブチーム 岩下 義明

(1) 今週の予想レンジ: 1.1550 ~ 1.1700 177.50 ~ 181.50 円

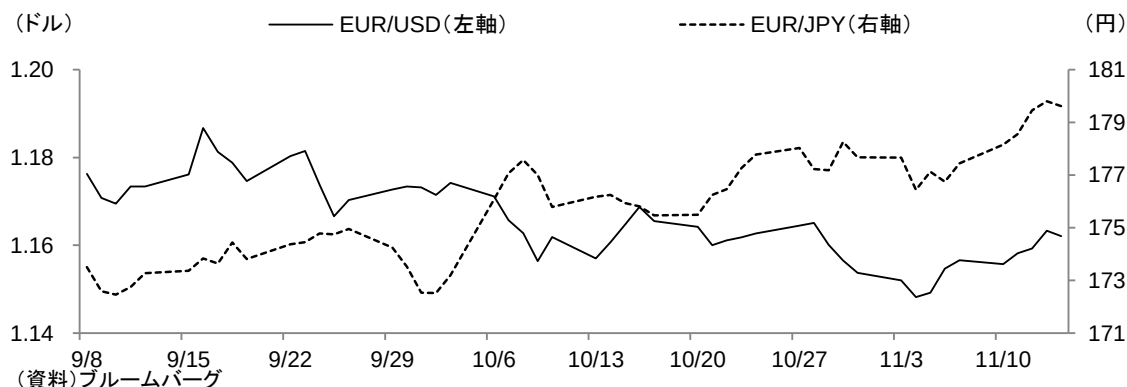
## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは底値を切り上げる展開。10日、1.1550近辺で始まったユーロ/ドルは一進一退の攻防。NY時間に独金利の低下を背景に週安値の1.1541まで下落した。11日、米国休日で流動性も少ない中、米ADPの週次雇用データにて4週間の雇用が減少したことを材料にドルが売られユーロ/ドルは一時1.16台まで上昇。その後はドル買い優勢となり1.1580台まで戻した。12日、米国休日明けドル買い相場となる中、じりじりと下落していたものの、ウィリアムズNY連銀総裁の「Fedは市場の流動性供給のために債券の買い入れを行う」というハト派スタンスの発言にドルが売られてユーロは上昇した。13日、英7~9月期GDPが予想を下回ったことを受けて英国債市場オープンとともに米・独・英金利が足並みをそろえて低下する中、ドルが全面的に売られてユーロ/ドルは上昇。その後、米国時間には米株がハイテク株主導で下落する中、一段のドル安となり週高値である1.1656を付けた。14日、米経済への先行きを巡る不透明さからリスクオフ気味でドルが売られ、ユーロ/ドルは一時1.1650近辺まで上昇していたものの、米国とスイスが関税交渉をめぐり合意したとの報道を受けて一転。リスクオフムードの中、ドル買い優勢となり下落。その後は、動意薄く推移し、結局1.1622で越週。

今週のユーロ/ドルは、一進一退の展開を予想。主な経済指標としては17日(月)に欧州委員会秋季経済予測、18日(火)に米10月鉱工業生産、米8月製造業受注・耐久財受注、19日(水)にユーロ圏10月CPI及び米8月貿易収支、10月FOMC議事要旨、20日(木)に9月雇用統計、21日(金)にユーロ圏11月PMI及び米11月製造量PMI及び米11月ミシガン大学消費者マインドの公表が予定されている。米国政府の閉鎖が解除された影響で米国関連の経済指標の発表予定が目白押しとなっているが、遅れて公表された一つ一つの経済指標そのものの結果よりも、Fed高官による解釈を受けて次の利下げ時期を探る展開になりやすいか。また、現在次回FOMCでの利下げ織り込みは0.5回弱と市場がどちらも織り込みきれておらず、まだ次回FOMCまでは相応に時間があることからドル主導では相場は動きにくい。欧州については、ユーロはここ半年ぐらいたの高値圏にあり、11月頭からは上昇基調が続いてきたが、今後も続くかは経済見通しが上振れするか次第か。特段下落材料は見当たらないものの、テクニカル的には一目の雲の下限で抑えられており、雲のねじれが控えていることからやや下目線で構えられている可能性があることには留意したい。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(11/10~11/14)の値動き: (対ドル) 安値 1.1541 高値 1.1656 終値 1.1622  
(対円) 安値 177.38 高値 179.97 終値 179.60



### 3. 英ポンド

欧州資金部 天沼 幹

(1) 今週の予想レンジ: 1.2900 ~ 1.3400 196.00 ~ 206.00 円

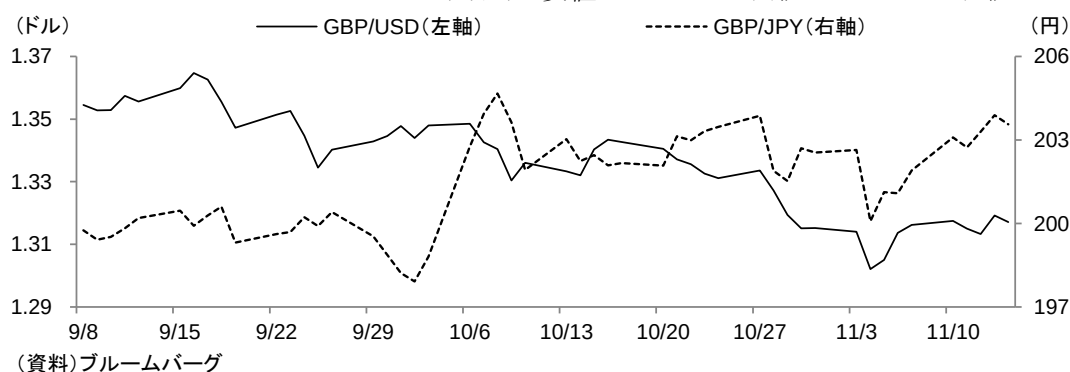
#### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週一週間の英ポンド相場は、週を通して上下したものの同水準で引けた。週初10日は、先週末に米議会がつなぎ予算案の成立に向けて進展を見せたことを受けてか、リスクオンの様相となり、欧州株の上昇を伴いながら英ポンドも底堅く推移。11日は、英9月雇用統計が市場予想を下回り、また失業率も悪化し、利下げ織り込みが拡大した。英ポンドは、金利低下を伴って下落。しかしその後、米ADP週間データで雇用の悪化が意識されドル安となり下落を取り戻した。13日、英7～9月期GDPが予想下回り下落で反応。一方で、米政府機関再開に伴う経済指標の発表への警戒感からかドル安となり、英ポンドは上昇を継続した。14日、米政府歳入の好調が要因となり、財政赤字が想定よりも縮小する可能性があるとの報道が流れ、英国債利回りと英ポンドはボラティリティをもって上下した。

今週の英ポンド相場は、上値重い展開を想定。米政府機関再開により遅れている米経済指標の発表に対する警戒感からドル安の動きもあるが、予算案を月末に控え、対ユーロでは継続的に弱含んでいる。主な経済指標では、19日(水)に英10月CPI、21日(金)に英10月小売売上高、英11月PMI速報値が発表される予定だ。デフレーションの傾向が認められハト派的に傾きつつある中、引き続き弱い指標が出れば、素直にポンド安になるように思う。オプション市場を見ると、一週間で1.3050レベルから1.3280レベルのレンジと先週よりも高いボラティリティが想定されている。

#### (3) 先週までの相場の推移

先週(11/10～11/14)の値動き: (対ドル) 安値 1.3085 高値 1.3215 終値 1.3175  
(対円) 安値 201.46 高値 204.07 終値 203.56



## 4. 豪ドル

国際為替部 グローバルFIチーム 袴田 慎

(1) 今週の予想レンジ: 0.6500 ~ 0.6600 100.50 ~ 102.00 円

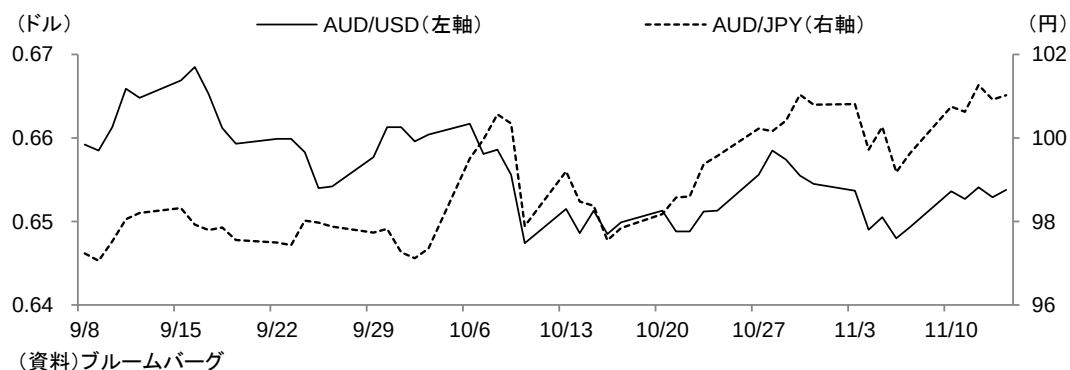
## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は小幅に上昇。週初10日の豪ドル相場は0.6501からスタート。米政府機関の閉鎖終了に対する期待から米株が上昇したことに加え、銅価格の上昇もあり、豪ドルは0.6540まで上昇した。11日、豪ドルは、米株・銅価格ともに上昇が一服し0.6516まで下落したが、弱い米ADP民間雇用者数を受けた米金利低下から0.6538まで反発。12日、豪ドルは、米金利上昇とともに0.6550まで小幅に上昇した。13日、豪ドルは、豪10月雇用統計が市場予想対比で強い結果となり一時高値0.6580まで上昇したが、その後は銅価格の下落や米金利上昇から0.6520台まで下落。14日は、豪ドルは米株下落とともに軟化したが、米株の持ち直しとともに反発し、0.6537にてクローズした。

今週の豪ドル相場は底堅く推移するものと予想。18日(火)にはRBA11月議事要旨が公表予定。先週にはハウザーRBA副総裁が講演で短期的な金融緩和の余地がほばないことを示唆した。豪10月雇用統計で堅調な雇用が示されたことも踏まえ、12月のRBA理事会でも11月に続き政策金利が据え置かれるとの見方が強いが、議事要旨で確認可能なRBAのスタンスには注目が集まる。利下げサイクルが終了した可能性のある豪州と、依然利下げサイクルの中にある米国で金融政策の方向性が異なることから豪ドルは底堅く推移するものと予想。米国の政府機関の閉鎖終了を受けて、経済指標の公表も再開される。米労働市場の弱さが改めて示されると、米利下げの織り込みが再び増加し、豪ドルの更なる上昇も予想されるだろう。

## (3) 先週末までの相場の推移

先週(11/10~11/14)の値動き: (対ドル) 安値 0.6490 高値 0.6580 終値 0.6537  
(対円) 安値 99.46 高値 101.83 終値 101.02



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。